

一九七八—七九

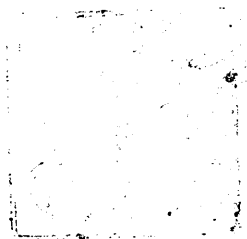
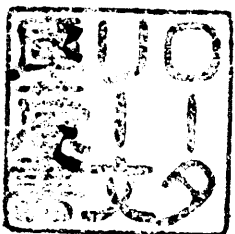
一年
七日

川口東ロータリークラブ

大熊武右衛門

一九七八—七九

一年
七日



まえがき

私は、昭和四十六年創立以来の会員である川口東ロータリークラブの会長の役を昨年七月から今年の六月迄お引受けしました。ロータリーの会長にとつて一つの仕事は、毎週の例会の席上で会長としての挨拶を致さねばなりません。此の文集は七日毎に開かれた例会での私の挨拶を一冊の本にまとめたものです。私が此の挨拶を続けるのに気をつけた事が二つあります。

一つは毎週の例会がクラブ会員として出席して何か得るものがあつたと思つて帰られるには毎度乍らの私の挨拶に非常に重点があると云ふ事でした。その為には私は私なりの趣味とか知識とかを構はず織り込む事の方が反つて良いと思つて続けたい事でした。つまり個性のある挨拶を一年間毎週続けたいと思つていました。今一つはクラブの委員会の中でも毎週会報を発行しなければならぬ会報雑誌委員会が、大変苦労される事を経験していますので、私は必らず挨拶の原稿をその日に持参して委員長にお渡しする様にして一年間確実に実行しました。従つてその原稿は会報の原稿として読んで頂く為に書き、実際の挨拶や卓話ではそれを主として話をすすめて週一度の役を果しました。一年を終り房して頂いた原稿用紙の束を見て、一年間の私の人生記録として一冊の本に見たい気が致しました。丁度私が会長をしている間に満六〇才の誕生を迎えました。又此の一年の間に長男、次男の結婚式を挙げさせて頂きましたし、会長の任期を終つたら内孫の男子が誕生しました。或る人生の還暦と云ふ年の一年の記録としてお聞きになつて積りで読んで頂ければ幸いです。

最後に一年御協力頂いたクラブ会員御一同に厚く御礼を申し上げます。

昭和五十四年七月

大熊 武右衛門

円の安定とデノミ (七月七日)

今日、新会長として始めて例会の席に会長挨拶を申し上げます。世界中のロータリーの例会と同じ様に新会長、そして新役員が誕生していることは皆さんが既に御承知の事です。

ロータリーのシンクスと云えばそれ迄ですがロータリーの相互の責任態勢を意識する上で非常に良きシンクスなのかも知れません。

しかし今こうして御挨拶申し上げる私としては此の先一年の山をこれからいよいよ登り出すのだと云う気持、大変だなど云う気持、そして阿久津前会長さん御苦労でしたと云う気持で居ります。後程本年度の会運営につきましてはクラブ協議会に於て申述べますが、どうぞ此の一年間会員諸兄の御協力をお願い致します。

さて此の数日、円高の傾向はとうとう一ドル二〇〇円の大台を中心とする動きになって来ました。私共戦前に勉強させられた者は一〇〇円は四十九ドルと云う当時の為替換算を思い出します。つまり逆に云えば一ドルは約二円だったと云う事です。もう一つ考えればもし百分の一のデノミを実施すれば戦前の為替基準に戻ると云う事でもあります。勿論当時の金本位制は今為替本位制に世界の経済が変って居りますが何か円高とデノミそして戦後三十三年、明後年は三十五年目になります。これは私ばかりかも知れませんがこういう関連性がないとも云えない情勢になって来ました。政治と社会が安定しさえすれば有り得る予感がとします。

何れにしても当分今後日本の円は二〇〇円一ドルの大台を中心になる事と思はれます。

会長基本方針報告

一九七八年～七九年度のクラブ運営重点

- 一、何事も「和」を中心に。……やわらぎむつみと向上奉仕を念頭に。
 - 二、クラブ運営は財政的にも決して無理はしない。
 - 三、各委員会の創意が生かされるように。
 - 四、楽しいそして意義ある例会を心がけたい。
 - 五、川口東ロータリーの名にふさわしい地域職域を代表するクラブにしたい。
- 最も、大切な希いは欠席のない、退会のないクラブを期して努力したい。
- 各委員会への希望

出席―例会の持ち方の研究、他クラブの実例の研究に努めて頂きたい。

職業分類、会員選考、会員増強―当然会員にあって良い職域の人、地域的な代表産業の人を積極的に入会するよう協力して頂きたい。

プログラム―会員相互の理解とつながりを持つために「私の仕事、私の趣味」を題に卓話を続けたい。但し原稿は会報委員会へ提出して頂きたい。

情報―新入会員については会活動、組織の指導の為に出席を含み紹介者は二ヶ月間の指導責任を有し、情報委員会はその指導について助言者になって頂きたい。

S A A―私語に注意願いたい。

以上、今年度の会運営の目標を要約しましたが、各委員会の創意工夫によつた活動努力をより期待するわけでありませう。

今日、厳しい情勢下にある中でロータリー活動を絶え間なく続けることは大変困難な条件かもしれませんが、共同社会の一員として、家庭のためにも、社業のためにも有意義に生かされる道が開かれると思われませう。お互いに手をさしのべ、和を中心にした親睦活動を一層深めることによつてクラブの発展が更に期待されると信じて居ります。

パリ祭とフランス革命 (七月十四日)

一年間私達ホストとしてカナダからの交換学生バット君を預つていましたが、昨日無事帰国しました。今日は七月十四日であります。パリ祭の日であります。パリのモンマルトルの丘の上にサクレクルの白い寺院があり、そこからパリを見降ろし遙かなエッフェル塔を見て「あゝパリに来た」と云う思いはパリに行つた人がすべて感ずる処だと思ひます。もう四十年前程前パリ祭という映画がありました。そのファーストシーンが此のモンマルトルの丘へ昇る階段から始つていたのでありますがパリ娘が期待したパリ祭の夜は雨、二つのコーモリがいつ迄も踊つていたシーンが私達にはなつかしく思ひ出されます。あの頃の映画そしてあの頃のパリ、何か今は求めても求められないものがある様に思ひます。

そのパリ祭は云う迄もなくフランス革命の発端の日一七八九年七月十四日のことであり、その日現在のエッフェル塔に近いアンバリッド廃兵院を襲つた民衆は二六、〇〇〇の銃を奪つてやがて当時政治犯が投獄されていたバステューユ監獄を襲撃したのです。守兵八十人、いつの間にか兵士をも含んだ民衆と交戦して破れ、此処にフランス革命が始つたのですが、当時パレロワイアルに住んだルイ十六世はその報告を受けて「それでは暴動ではないか」と云つたそうです。報告した侍従は「いや陛下革命であります」と云つたと云う有名な話が伝つて居ります。そのブルボン家最後の王ルイ十六世は一七九三年一月にはコンコルドの広場でギロチンに命を失うのですが、又それから僅か六年ナポレオンの統一という時代の変りの激しいフランスになつて行くわけでありませう。然フランス革命は近世ヨーロッパの一つのエポックだと思ひます。丁度日本では松平定信の寛政の頃であり、ナポレオンの統一の頃が日本橋からロンドン迄水はつながっていると書いて投獄された林子平の頃です。

夏の登山シーズンを前に (七月二十一日)

今年の夏は梅雨と云う期間が非常に短かく終つて例年なら二十日過ぎ、今年も正確には二十日から土用の入りになるのですが、既に夏の猛暑が十数日続いて居り、早い夏の感を深くします。逆にヨーロッパは大変涼しい夏との事ですが、西独ポンの五ヶ国首脳会談もそれなりの成

果を上げた様です。初め日本のジャーナリズムは日本が数々な苦境に立つのでないかと報道されていましたが、実際は日独協同路線が成功して特に大きな非難もなく、逆に出席した福田首相には政権に自信を得たと云う報道です。之から総裁公選、臨時国会その成行きでは国会解散と云うことも予想されないではありません。

さて夏と云えば今日から子供達の夏休みに入り、海や山が急に賑やかになる事でしょう。私自身も青少年の頃は登山が好きで夏休みには十日や二週間はお通しで山の生活を続けていました。現在八十になる母にはお前は心配ばかりかけると良くこぼされたものでした。

然考えて見ますと過去の人生でいろいろ登山と云ふことを通じて修得したものが役立っていると思ひます。先日も鳩ヶ谷に住む御婦人が用事で見えられて、今長男はアラスカのマッキンレー、之は六、〇〇メートルを越す山ですがそこへ行つていて心配でならないとこぼしていました。狭い国土の中の限られた山々を考えれば新しい山を求めてアラスカへもヒマラヤへも飛んで登山をしたのが山登りの宿縁かと思ひます。

人は何故山へ登るのかと云う問いに、確か一九二八年だつたと思ひますが当時チベット側からエベレストに登り消息を絶つた英国の登山家マロリーは、「何故なら、其処に山があるから」と云う名文句を残して若い命を絶ちました。もし、皆さんの御子弟が登山に熱が上つている方がありましたら、山は自分で登るのだと云うこと。つまり計画は自分で立てると云うこと。山には入つたら自分の位置を明確につかんで山を歩くと云ふこと。そして道に迷つたら判る処迄戻れということ。いけないと断定したら絶対に引き返せということをお教えになつて頂きたいと思ひます。

今申し上げた幾つかの山の鉄則は私の人生にとつても又一つの基準であるという気がして私は登山は修業だと思ひ起しているわけでありました。人は変つても山は変わりません。然山登りが新しい山々を目指すると云うことも変らないと思ひます。今年も又幾組ものパーティーがヒマラヤ・カラコルムに入るとは思われます。山の無事を祈つて今日の挨拶と致します。

古賀政男氏逝く (七月二十八日)

今年の夏は早くから夏型の天候になつて、もう二十二日間連続して三十度以上の気温が続いているそうです。然例年より梅雨が短かつた為に暑い日射しですが湿度が少く、何か大陸の夏の感がして快い、暑さと思ひます。

その暑さの中で、二十五日作曲家の古賀政男さんが亡くなりました。その最初に作曲された曲が昭和六年の「影を慕いて」だそうですから四十七年に渉る作曲生活であり、今日流行るカラオケ音楽でも恐らく何割かは古賀メロデーだと思ひます。人間、一ツ職業を得て一千万枚以上のレコードとなつて五十年近く日本の人々に親しまれ、或る時は哀愁の歌として、或る時は青春の歌として、又或る時は、戦場で遙か故郷を忍ぶ歌として、生き続けた。ロータリーの職業奉仕の見本のような気がします。

古賀政男の曲を思い出しますと大正時代、例えば枯すゝきや、カチューシャ、等のイメージと違った昭和と云う感がします。酒は涙か、丘を越えて、或は影を慕いて、ギターの伴奏もありましょうが、其処に昭和と云うものを感じさせます。その昭和が、十六年経って大変に不幸な戦争に入って行き、そして終戦、やがて又特に男性として哀愁のある、やるせないと云うか歌が、ひき出されたのは矢張り古賀メロデーの、湯の町エレジーであり悲しい酒であったと云うこと。それを通して考えて来ると昭和の男性の基調は、哀愁を求めている姿になって来てしまうのも、どうしようもない、と感じて来ます。

多くの人に親しまれた曲を作った人が戦争の間、時代に迎合する作曲はしなかつた。寧ろ、戦時中昭和十五年に作つたと云う「誰か故郷を思はざる」は或いは当時の軍にとって好ましい歌でなかつたかも知れない。然その歌が、他に急造された軍歌よりも兵隊達に愛せられたと云いますが、此の辺りに逆境の中から大衆音楽につき進んだ故人の真骨頂の人生感、社会感があるように思います。

昭和を奏でた人も逝つて、昭和前半が又音を立て、去つて行く様な気がします。

リーチアウトの虚実

(八月四日)

今日は申す迄もなく第二五七地区、本年度のガバナー春日部R.C.の平野寿先生がクラブとして正式な御訪問の日であります。例会終了の後クラブ協議会を開き御多忙の中を折角訪問された平野ガバナーを囲んで意義ある愉しいロータリー研究の集いに致したいと存じています。

本年度のR.I.会長、レヌーフ氏によつて本年度のターゲットは「リーチ・アウト」手をさし伸べよう。と云う極めて単純な、然動作の比喩を以てロータリーの精神を示す、見事を表現であると思います。去る五月十六日、東京に於ける次期会長中食会の席上、会長レヌーフ自身の挨拶があつてそれを同時通訳のレシーヴァーを聴き乍ら簡にして明、素晴らしいターゲットだと感じました。然同時に私にとつては全く別の印象を持つた事も事実であります。と云うのは、リーチアウトのメッセージの表紙に特に二つの世界の地球図があり此の一つの地球の上で二つの世界がありその二つの世界と云うだけでも、我々は互いに相手を知らない事が多い。相手を知り、其れへ手をさしのべて行く事こそロータリーの窮極の理想であると云う様な話がありました。然同じ一つの世界の国にあつても会長の住むオーストラリアは日本の面積の二十一倍、人口は全土で東京と略同数の一、三〇〇万、同じコモモンウェールズのニュージーランドは日本の八十五%の面積に人口は僅かに三〇〇万人。而も白豪主義の伝統は今日も続いて他国からの移住は殆んど認めて居りません。同じ英国が支配していて漸く今から三十年前に独立したインドは面積は日本の八・五倍、人口は五億五千万實際は六億を上回っているであろうと云われて

います。私は二つの国を旅行して全く別の印象を得て帰りました。一方では世界は大変だと思
いました。どんなに貧しくとも生きて居る人が居る限りその人間を救い続けなければならぬ。
世界の共存共栄は富んだ国にかゝつて来ても止むを得ないと云う感でインドから戻りました。
一方オーストラリア、ニュージラランドに旅をした時には今世界で北と南の問題がとり上げら
れているのに、此んなに気候的にも恵まれた広い国土を持つ南半球の国を一帶どの様にして門
を開かせる方法があるのだろうか。と云うのがその実感でした。而もインドもオーストラリア
も二つとも且て世界を征服した英国の統治下にあつた兄弟国なのです。その限りに於てレヌー
フ会長の発言は富める立場の発言であり、リーチアウトは慈善的な意味に解せざるを得ないの
であります。

八月十五日 私のルーツ (八月十一日・八月十八日)

先週は年に一度の地区ガバナーの公式訪問も無事終了しました。極めて明朗素直な御意見の出
るクラブでありましたと云う平野ガバナー帰途の御印象をお伝え致しクラブ会員御一同、特に
協議会に御出席の皆さんに、会長として心から御礼申し上げます。

今日は八月十一日、あと四日で終戦の記念日になります。あの日、あの時、此所に居られる
クラブの皆さんは何処でお迎えになつた事でしょう。三十三年目の時川口東ロータリークラブ
の一員として苦しいが然平和な時を四十九名が集う等とは勿論御想像もつかなくつたであろ
うと存じます。袖すり合うも多少の縁と申しますが、改めて此処に集うお互いの縁を大切にし
たいものだと思います。そう申し上げる会長である私は神奈川県藤沢市にある航空隊の第二十
連合航空艦隊司令部の一等主計兵として司令長官である或る皇族と共にラジオで終戦の詔勅を
聞きました。

此処に紙質も悪い私の若い頃、戦中戦後の随想ノートがあります。その内の十頁程は海軍時
代、兵隊が此んなものを書くことは勿論禁ぜられていましたが当時司令部の事務室に居た関係
から端紙にメモしたものをそのまま帰宅してから書き写したものです。その中に八月十五日の
感想が箇条的に書かれています。大変私事で恐縮ですが、先づ、朕一人は省みず、之以上の無
益の被害が出る事を恐れるという事で私も事実そうでしたが司令部一同と共に正に泣きました。
そして私は

みいくさにつとめし民の少きに

尙天がかりけり君のなさは

と云う下手な歌を詠んでいます。

青い空である。敵も来ない。爆弾も落ちない。防空壕の必要もなくなつた。今が一番静かな
時だ。此の静けさは何時迄続き、何時どの様に此の空気は破れ去られるだろう。

今後の問題、日本軍部の行動、食糧不足、物価悪性インフレ、戦場の転換、思想の問題

もし何が日本を敗戦に落し込んだかと今の私に問うなら私は日本に政治がなかったということを答えるだろう。

ヨーロッパが幾変遷のなかに感じとつて来た文化、彼等が身に受けて来たもの、それは恐らく日本人にとって此の敗戦によってのみ体得されるのではなからうか。此の日本の結果は悲劇には違いない。然何時かは来るべき悲劇である。

敵の武力を背景とした教育の干渉が何処迄のものであるか。恐らく自由とデモクラシーが目標とされるだろう。之に対する我々の理解が今後の日本を決定づけるだろう。

終戦の日のメモに以上の様なことを書いています。

最近、ルーツ、原点と云う言葉が良く使われます。八月十五日の私の感想は或意味で今日迄、その後の私の行動、考え方のルーツと云う感じが致します。

日中国交と世界の動き (八月二十五日)

雨の殆んどない炎暑と云う言葉にふさわしい今年の夏も八月と云う月を後数日でどうやら秋の季節になつてしまひそうですが、今日も又ビジターの皆様、会員の皆さん、本日の例会に御出席有難う御座います。私且て十四年前の秋にエジプトのカイロに立寄つた事がありました。大変暑い日射しで、当時日本の或る銀行に勤めるエジプトの人に、大変ホットだと云いましたら、エジプトはホットでなくてヒートだと云われました。炎暑と云う言葉は成程ヒートにつながる言葉かも知れません。

此の暑い中で去る八月十二日、中国との間に平和条約が締結され、長い戦争を挟んでの隣国同志の間に確かな絆が結ばれたことは大変結構な事だと思ひます。中国との間で一番論議されたのは「覇権」と云う問題でした。

私は外交評論家でもありませんし、又申し上げる程の知識も有しませんが幾つかの命題について此の処考えて居ります。そして此の事が時間と共に歴史に変化を与えるのではないかと云う予感を私なりに感じている事について申し上げたいと存じます。一つは共産圏にあつては一度仲が悪くなつた同志の友好は戻らないと云うことです。之は広く云われている事ですが私なりにいろいろ本等で辿つて見ますと確かにそんな気がします。もう一つは日本で見ると共産主義と之が所謂覇権に問題がある処ですが、現実に軍事行動に遭遇した国では此のイデオロギーに対する感が違ふと云う事です。三日程前の新聞にソヴェエトがチェコのブラハに軍事介入をし

た時から十年経つたと云う記事がのつていました。私はその事件の翌年にブラハに旅行しましたが、市の中心でチェコ人の抵抗があつたパツラフ広場には多くの弾痕が残つていました。中食の時偶然或る日本の新聞社の特派員と一緒になつたので話したのですがブラハの人は静かだが何か鬱屈した重い気がすると云つた私の言葉にブラハの人は現在政治的な事は何も話さない。普通の市民の中にも親ソ的な古い共産主義の人も居れば新しいチェコに賛成の人も居る。一寸した話がどの様な結果になるか、と恐れているから何も云わないと云つていました。

それから二年後隣りの韓国の釜山で泊つたホテルのマネージャーが、私に此う云いました。日本は島国で大変恵まれてゐるから判らないでしょう。共産主義は思想の問題として考えているでしょう。処が私達は、私達の同胞を殺傷しながら此の釜山の郊外迄攻め込んで来た。それが共産党のした事だと受取つています。と云つていました。日中条約締結の後、華国鋒主席が東欧親善の旅を続けています。私の旅行者としての印象では中部ヨーロッパではソヴィエトと云うよりはロシア人と云ふものに対する警戒感が非常に強いと云う感を持つています。

日本でもロシアという熊で表徴しますが、ヨーロッパでも同じだと思ひます。北方の動物であると共に何か貧欲な表徴にもなつています。此の意味では覇権と云う文字に対する共通した恐怖感をソヴィエト以外の共産圏の国々は持つてゐるのではないかと私は思ひます。

もう一つの問題はインドシナ、ベトナム、カンボジア、ラオスを取巻く問題でアメリカ議会でも問題になつてゐるようですが、日本の新聞はインドシナの解放と云うことでアメリカ帝国主義と一齊に非難し続けました。処が特にカンボジアでは無気味な粛正が続いてゐるようです。十一年前、丁度シアヌーク政権が倒れる前には私はカンボジャに旅行した時二つの大国から援

助を受けるのは大変な危険があると云うことと、アジアの後進国は或る程度社会主義的發展の他あるまいと思つて見て参りました。処がその後の著しい変化は主義より勢力圏の実態と云うことが問題になつて来つてあります。インドシナの行方は多くの後進国に微妙な影響を与える。私が申し上げた幾つかの考え方の先に私は次の世界の姿が何か割り出されて来る様に思ふ。此の事を申し上げて今日の挨拶に代えます。

関東大震災の日に (九月一日)

今日は九月一日、申す迄もなく五十五年前関東大震災のあつた日であります。現在此の会場に居られる方の中でもあの震災を実感してゐる方は少なくなつて居られると思ひます。それ程既に遠い歴史の中にありますが、さて先日の宮城沖地震の時もそうであるように地震と云えば関東大震災が引き合いに出される。実際にマグネチュード7.9と云う烈震はそれ程大きかつたし、被害もあつたと云う事だと思ひます。

私は当時五才でした。然、事、震災の記憶は何か非常にはつきりと記憶してゐます。その日の午前中には 雨が非常に蒸し暑い日で、私の家では昔からの例で八朔の日のうどん打ちをしてゐた事。それが終つて母と生れたばかりの妹と私が居た奥座敷、そこへドーンバリバリと突然起つたゆれ、丁度上下左右に家全体がみくちやになつた事。父に横抱きにされて庭へ